

奥内の石垣棚田

Only Oneのふるさと

檜田いく子

HINOKIDA Ikuko
株式会社 日水コン / 総務部 / 人事企画課



樹齢千年を超えるという大銀杏の少し下に、待望の水車小屋が復元された。

沢水を掛けてゆっくり回る水車を背にして、眺めのいい位置にベンチがあり、急峻な棚田が眼下に広がる。

棚田の畔とあぜ道は地図で見ると等高線そのもので、稲株にして奥行十数株ほどの細長い田んぼを、ゆるい曲線で仕切っている。仲秋を過ぎた午後陽の下に稲刈りが終わった石積の田が休んでいた。

奥内遊鶴羽地区の棚田中腹には平家の流れを汲むという10戸の集落が現存し、これまで耕作を放棄することもなく棚田で米をつくりつづけてきた。

この石垣はお城のそれとはちがう。どこか名のある石山から整然とした切石を、多くの人手をかけて運び込んだのではない。少なくとも500年以上も昔に、この地の先祖が田を増やそうと山の斜面を削り、掘り出した大石の上で生木を焚いて石を焼き、沢水をかけて石を割り、その石を組み上げて造った石垣だ。田は、水平に造った平場に石を敷き小石を詰めて粘土を被せる。ひび割れるほど干し固めてから、厚く周囲の山の土を入れて、一段一段造ったのだという。平場の面積を少しでも広く取るために石垣は垂直どころか反り返っている。数世紀もの年月に苔や草に染まりながらも、野面積みの石垣は堅固で断面の鋭さは切り割った時のままである。仰ぎ見れば集落の上になお、棚田の石垣の法面がそそり立つ。渓流を引き入れて急斜地に造った山間型棚田である。

山の暮らしの豊かさの源泉は静謐な湧き水にある。だが、沢の水は冷たい。そのままの水温では稲が育たないから、ところどころ、石垣の足元にぐるりと十数センチの細い裏アゼをまわしてある。水はまず、竹や木の樋で石を敷いた裏アゼに降ろす。暖まった石垣の熱と陽射しで“ぬるめて”田に入れる。上の水はがま口や水口からゆっくり下の田へと降りていく。

石垣に寄せて稲刈り機がシートをかけて止めてある。「先祖は先を読んだのかなあ。このへんの棚田は丸くない。角で長い田んぼだから今どきの機械を入れて使える」水と土指導員・金谷透氏がうれしそうに笑う。

石垣の擁壁はそのままだが、最近、棚田の畔や主な農道だけはコンクリートで舗装した。田に張った水が漏れないために、春、田の縁の内側を全部泥で塗り固めなければならない。延長500mも“あぜぬり”をしてきた



写真1 - 6月の棚田・古い石垣に早苗が映える



写真2 - 石垣に寄せて稲刈り機が止めてある



写真3 - 裏アゼで水をぬるめる

農家もあるから、これで春、農作業が非常に楽になったという。写真家は白い舗装はどうかと言うが、まず棚田の中で暮らしがつづく事が先決だ。

柴や薪を取った昔からの雑木林が棚田の周りにそのまま残り、季節ごとに山に化粧をさせる。ハゼ・ナラ・山栗・ドングリ・紅葉・楓など、山全体が醸し出す四季の美しさはたとえようがないと言う。

雨は、山に繁る木々を打ち、落ち葉で薫る深々とした土にしたたる。沢水は山を駆け下り、ため池や棚田に止まって(土砂崩れが食い止められ)水田を浸しながらゆっくり地中に沁み込む。やがて幾層かの地下水脈となり、扇状地の端で泉となって自噴する。日本の国土はモンスーン気候帯の褶曲山脈からなるが、河川洪水の多くを未然に吸収してきた水田の役割は大きい。

日本人のふるさとの原型は、山川がある中山間地の水田風景だと言われるが、その日本の水田の8%は棚田(土地の傾斜が1/20以上)で、全国に分布する。湧き水があるなどで崩れやすい傾斜地の土と水を、耕作地では棚田の石垣という擁壁で治め、住宅地では鎮守の森などの斜面緑地で守ってきた。

環境の世紀にあって土木遺産を見直すとき、奥内石積の棚田は意味深い。限りなく地形に配慮した土木技術。



写真4 - 平場を広く取るために石垣は反り返っている



写真6 - 沢水がゆっくりと水車をまわす

それによって保全される自然環境。それが可能な規模からくるのか、水車小屋のあたりでは、本物の空間に立っている感慨を覚えた。

復活したばかりの水車がはにかむようにゆるく回っている。幾代もの先祖の慈が宿るかのよう...

奥内の自然と人を見守る2本の大きな大銀杏。孫の代になって実る樹だから、公孫樹とも書くと初めて知った。

(写真: 1、5、金谷透 他、筆者)

- 参考資料
- 1) 『日本の棚田』中島峰広著 古今書院
 - 2) 『日本の原風景・棚田』棚田学会準備グループ編1999
 - 3) 『ふるさと発見! 奥内棚田の里(中山間ふるさと保全対策促進事業ワークショップ開催記録H11年度)』愛媛県



写真5 - 古代米の田植えと復元された水車